

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部2回生 菅澤由佳子

ストラスブール・ハイデルベルグ派遣の3日目の活動は、Palais Rohan ミュージアムとノートルダム大聖堂を中心としたストラスブール市内の見学だった。

ストラスブールのノートルダム大聖堂は、12世紀から15世紀にかけて建設されたためいろいろな様式が混ざり合った不思議な見た目の建築物だ。博物館ではそれぞれの時代ごとの彫刻の一部やレプリカが展示してあって、実際に触れそうな距離まで近づいてみる事ができた。Palais Rohan ミュージアムのルネサンス絵画は、まさに世界史でならったこの時代の絵の変化がみられてとても興味深かった。プログラムに参加したメンバーの一人が美学を専攻していて、私が展示物を見て思った疑問に答えてくれたり、面白い展示物について感動を共有しあったりしてくれた。普段の大学生活ではあまり交流のなかった、異なる専修に所属する学生と友人になれたことも、プログラムによる貴重な体験の一つだったと思う。

ノートルダム大聖堂ではその日ミサが行われていて、ミサの直後に中に入り荘厳なステンドグラスや有名な時計を見学した。直前に博物館で建築について学んでいたため、なおさら目に映るものが興味深く感じた。しかしノートルダム大聖堂について一番印象に残っているのは、立派な建物やステンドグラスではなく鐘の音だった。ホテルが旧市街にあったため、ストラスブール滞在中は、毎朝、活動に向かうときに鐘の音が響いているのが聞こえ、私にとっては観光地である大聖堂は街にとっては日常の一部なのだろうと考えると、その土地の人々の生活や歴史の一端を知ることができた気がした。

ストラスブールは、二つの国のはざまにあり歴史上何度も領土戦争の最前線となった町で、同時に文化の交流地点として栄えた場所でもある。そのため歴史的に重大な出来事が数多く起こり、WWII後にはヨーロッパの連帯を進める欧州評議会が置かれた。私は現代史を専攻しているのだが、それまでヨーロッパの複雑な歴史に関心は持ちつつも、それらをただの知識としてしかとらえていなかった。しかし、中世から現代にかけて、様々な歴史的な出来事が起きた場所を実際に訪れ歩いたことで、歴史をより身近なものとして感じるようになった。中世の建築物と、そこで今でも行われる宗教儀式を見たことや、領土戦争の跡地と戦後社会を構築してきた欧州評議会が同じ場所にあると知ったことで、バラバラだった歴史の知識が、昔から今まで同じストラスブールで起きた出来事として繋がりをもち、そこにいる自分にとってもリアルで身近なもののように感じたのだ。

今まで現代史に漠然と興味はあったが、なぜその分野を選んだのかについて自分で心から納得できる説明ができなかった。しかし、この研修で過去と現代の繋がりの実感したことによって、私は自分が体験できなかった過去が、現代とどのように繋がっているのか知りたいと思っているのだと、学ぶ目的をはっきり説明できるようになった。